

中山康雄：『言葉と心』

(勁草書房, 2007, xiv+227p.)

三木 那由他

---

本書は言語哲学上の様々な問題を扱っている。指示の問題、メタファーの問題などで、そのそれぞれにつき過去の哲学者がとった代表的なアプローチが批判的に紹介され、それを踏まえて独自の解決が試みられている。いずれの解決も筆者流の「全体論」という一つの立場からなされている。

第一章で扱われるのは指示の問題である。ここではフレーゲの「意味 *Bedeutung*」と「意義 *Sinn*」の区別が大きく取り上げられている。フレーゲは意義を客観的に定まるものと見なしたが、それが実は話者の信念に依存して定まることがあると筆者は指摘する。そしてクーンのパラダイム論を援用しつつ、ある記号の指示する対象（「意味」）は、その記号が持つ客観的意味内容（「意義」）によって決定されるのではなく、その記号を用いる話者の背景信念に依存して定まると主張する。この時点では筆者の言う全体論の全貌は明らかになっていないが、この「記号の意味内容は話者の背景信念に依存して定まる」という主張は、本書を貫く基本方針となっている。

筆者の全体論のアウトラインは第二章でおおよそ述べられる。第一章では記号（及び文）の意味内容は話者の背景信念に依存

して定まるとされたが、具体的にどのようなように定まっているかは解明されなかった。そこで「言葉の意味とは結局何なのか」というのが第二章のテーマとなっている。それに当たってまずクワインの全体論が紹介される。そしてクワインの全体論が含意する相対主義的立場を批判しつつも、その基本的発想を受け入れ、全体論とフレーゲの主張した意味の「合成原理」を合流させる。すなわち、筆者の取る言語観は次のようにまとめられる。個々の文に含まれる個々の語の外延は、その文を発した話者の信念総体が全体として真になるように解釈される（全体論）。同時にそうした解釈に基づいて個々の語の意味内容が定められ、それをもとに各文の意味内容が決定される（合成原理）。

確定記述の問題が第三章では論じられる。登場する哲学者はラッセルとストローソンだ。第三章の目標は、ストローソンの用いた「前提」という概念をもとに、話者の背景信念が単に発せられた語の意味を規定するのみでなく、それ自体コミュニケーションで重要になりうるということを指摘することにある。ラッセルは確定記述句を文脈的定義により消去する理論を構築し、確定記述句を含む文で主張されていることの一つに、「その句で指示される対象が存在する」ということが含まれるとした。それに対しストローソンは、そうした対象の存在は「主張」されているのではなく、むしろ「前提」されているのだと論じた。ストロ

ローソンに概ね賛同しながら、しかしストローソンもそもそも「前提」とは何であるかを明らかにしていない点で不十分だと筆者は論じる。そして「前提」とは話者の背景信念の一部（特に、話者が聞き手と共有していると思っている背景信念）にほかならないと主張する。これにより筆者は、ストローソンの立場を基本的には支持しつつ、それを自らの全体論の一部として位置づけることで、その明確化を図っている。

第四章では、直示語についてのカプランの議論、確定記述に関するドネランとクリプキの議論、及びメタファーをめぐる諸々の立場を紹介し、文（語）の「公共の意味」（客観的意味）と「話者の意味」（話者が聞き手に伝えようとしている意味）がずれる事例を幅広く扱っている。「公共の意味」とは、おおよそ「文の文字通りの意味」と同様のものを指している。筆者はいずれの事例についても、最終的に聞き手が特定する意味は「話者の意味」であるとしている。ただしそのための適切な解釈は、話者の用いた文の「公共の意味」と文脈情報に基づくと述べられる。さらに筆者は、「会話の格率」により「公共の意味」から「話者の意味」が引き出されるとするグライスの理論に反対し、「話者の意味」は聞き手が話し手を「合理的行為者」と見なし、その発話や行為の背景には合理的な目的があると想定することで理解されるのだとする。

五章から七章は、それぞれ類似の問題を扱っており、信念内容に関するパズルがそ

れまでに述べられた全体論によって解決されることが示されている。各語の意味はその話者が持つ背景信念により定まり、また意味の合成原理が成り立つのだから、当然話者の発する文の意味も話者の背景信念に相対的になる。五章から七章で扱われるパズルはすべてこのことを十分に認識していなかったために生じるとするのが筆者の診断である。フレーゲ、クリプキ、パトナム、バージといった哲学者達の議論が扱われている。

例えばバージの議論は以下のようなものである。バージは次のような物語を構成する。Aは長年膝の関節炎を患っている。最近では腿も痛くなってきた。そこでAは医者に「私の関節炎は腿にまで広がった」と相談する。しかしこれは誤った信念である。というのは「関節炎」は関節の炎症を指すからだ。これに対し、ある仮想世界が考えられる。そこでは「関節炎」はリウマチ性の病気にも用いられる。ここでA'にAと同様のことが起き、同様の発言がなされたとする。そのときA'にいかなる信念が帰属されるのか。バージの主張は、「AとA'は同じ内的環境（身体状態など）にありながら、信念の内容が異なっている。それゆえこの信念の内容の違いは外的環境（特に社会環境）の違いから生じると考えられる」というものである。これに対し筆者は、信念の内容が異なるのはAとA'それぞれの発話文を話者の立場から理解し、話者に信念帰属をした場合のみで、各話者の立場か

ら理解して信念帰属をなしたならそれらは同様に真なる信念であり、それらが異なるとする根拠はないと論じる。バージの議論は信念内容に関する内在主義(信念内容は、主体の内在的性質のみから説明できるとする立場)への反論としてなされたが、筆者は上のような分析から次のように述べる。ある発話文を話者の立場から理解するか、それ以外の立場から理解するかに応じて、信念内容についての内在主義的な理解と外在主義的な理解はともに可能であり、それは状況に応じて使い分けられるべきで、どちらかの立場のみ正しいとするのは誤りである。

第八章では、それまでもしばしば言及されてきた「公共の意味」に焦点が当てられる。筆者は「公共の意味」を生み出す装置として「権威」という概念を持ち出す。ある語の意味が何であるかということについて意見の一致が見られなくなったとき、われわれは専門家や辞書の説明をもとに、意見の一致を見出す。こうして「公共の意味」は安定化する。むろん政治的変動などにより、「権威」が揺らぐこともあり、これにより「公共の意味」の安定は失われうる。そして新たな「権威」を見出すことで「公共の意味」は再び安定する。このプロセスにおいて、語の意味はときに変化する。実際、国の崩壊などに際して語の意味が変わるということは、歴史的にもしばしば見られることである。

本書で描かれた筆者の立場は、結局以下

のようなものとなろう。例えばフレーゲ、ラッセルといった哲学者は言語の意味を客観的、絶対的なものと想定していた。他方で、話者が聞き手に伝えようとしている意味こそが、言語の意味にとって本質的であるとする立場もありうる。しかし、前者は指示の失敗やメタファーなどの事例をうまく処理できず(少なくとも直観に反する処理になる)、後者は突き詰めれば相対主義的言語観に行き着きかねないという欠点を持つ。筆者が提案するのは、全体論と「権威」によってこの両者を橋渡しする、第三の立場なのである。言語の客観的意味(「公共の意味」)だけを重視する立場も、「話者の意味」だけを重視する立場も、ともに不十分だ。全体論と「権威」は「公共の意味」と「話者の意味」の動的な結びつきを明らかにする。「話者の意味」は、話者の背景信念から全体論的に構成される。その背景信念には、用いられた語(文)の「公共の意味」が含まれており、その客観性が「権威」によって保証されることで、満足の行くコミュニケーションが可能になっている。そして「権威」が揺らいだときには、新たな「権威」が指定され、その指定された者が用いていた「話者の意味」が新しい「公共の意味」となる。この言語の意味の二つの側面(及びその結びつき)を正確に把握し、一方のみに偏ることなく実際の言語現象を理解する、というのが筆者の提唱する言語観なのである。

筆者の全体的な立場は、直観的には概ね

妥当に思われる。さらに様々な問題を同様の手法で解決できるという一般性の高さも、筆者の立場を説得的なものとしている。ただ八章で中心的に論じられる「権威」という概念には疑問が残る。われわれはしばしばある語を国語教師や辞書が正しい意味だとする意味よりも、友人や知り合いがよく用いるような意味で使ったりする。例えば「役不足」という語がある。国語教師や辞書はこの語が「与えられた役が、その人の実力にふさわしくなく軽いこと」を意味すると言うであろうが、われわれは「役不足」をむしろ逆の意味で用いているし、これからもそうだろう。そうすると筆者の説明では、国語教師や辞書ではなく、われわれの友人や知り合いなどが「権威」を持っているとするか、「権威」がすでに揺らいでいるとするしかないと思われる。だが前者を取れば、その語についての知識が特に際立って多いわけでもない者に「権威」を認めることになるという問題と、結局のところ具体的に誰が「権威」と認められているのかが不明確になるという問題が生じる。後者を取ったなら、それにもかかわらず「役不足」の意味が何らかの仕方で現に安定しているという事実を説明できない。「公共の意味」の規定においては、筆者の主張するより、もっと複雑で重層的な仕組みが働いているように思われる。それがどんなものであるにせよ、少なくとも「権威」という一言で片付けられるようなものではないだろう。

筆者の主張が最終的に依拠せざるを得ない「公共の意味」という概念については、さらなる分析が必要だろう。しかし言語と信念のダイナミックな関係を一般的な形で描き出そうという筆者の姿勢は、それ自体で十二分に刺激的なものであろう。